



大井川上流の流れと紅葉

目次

御挨拶..... P2 ゆめ未来局伊豆新世紀創造祭推進室長 澤田茂夫	シニア・ワーク・プログラム造園・緑化技術講座始まる 高齢者の雇用に御理解と御協力を..... P5
住宅展・環境フェアに出展、 事業や行事が目白押し..... P3~4 住宅展へ出展 環境フェアにも出展 ガーデニング教室開催	会員投稿 矢なわれゆく植物 オニバスの復元活動..... P6 県庁内の緑地を終えて..... P7 認定誌を利用した緑地大園の草園 本年度の育成管理巡回指導全日程終了
夏期研修会を開催..... P4	話題の森・お知らせ・編集後記..... P8
受験対策講習会を開催..... P5	



ゆめ未来局伊豆新世紀創造祭推進室長
澤田茂夫

貴会の皆様には、日ごろから、伊豆新世紀創造祭の推進につきまして、御理解、御協力を賜り、感謝申し上げます。

また、貴協会からは、伊豆新世紀創造祭に向けた治道修景の御提言をいただいたところであり、改めて御礼申し上げます。

御案内のとおり、伊豆地域は、いまだ観光を主産業として発展してまいりましたが、バブルの崩壊・観光ニーズの多様化、さらには伊豆東方沖群発地震等により観光客が減少し、伊豆地域を取り巻く状況は大変厳しくなっております。

先ごろ公表された観光客入込統計によりますと、平成九年度の伊豆地域への観光入込客数は五、四〇〇万人で、八年度と比べて総数で二七四万人余り（四・八％も減少）しています。最盛期である昭和六三年度の七、三五〇万人に比しますと、実に、一九五〇万人（二六・五％も減少）していることになります。

このままでは、日本一の観光地である伊豆は、その地位を維持することが困難であるばかりか、地域経済・社会にも深刻な打撃を受けることになりかねません。

このため、静岡県では、二十一世紀を迎えるに当たって、いままでの伊豆のイメージを一新し、新しい伊豆を創造する大規模イベント「伊豆新世紀創造祭」を企画しました。

この事業は、伊豆が一体となつて、二十一世紀にふさわしい観光システムを構築し、また地域の特性を生かした数々のイベントを開催することによつて、生まれ変わった「伊豆」を広く内外に売り出していこうとするものです。

伊豆新世紀創造祭は、平成十一年十二月二日から十三年一月一日

までの三六八日間、伊豆全域で開催し、特定のパビリオンを中心として行われてきた従来の博覧会とは異なり、伊豆十二市町村全域を会場に、多彩に展開するのが大きな特徴です。

創造祭の事業は、四つの柱から構成されています。

まず、第一は、イベントの開催ですが、近年の観光トレンドであり、伊豆の個性でもある「温泉」「食」「スポーツ」「文化」体験の四つのテーマを切り口に、伊豆の魅力が体験できるいろいろなイベントを展開し、誘客のきっかけづくりに努めます。現在、全域イベント、回廊イベント、市町村の単独イベントなど、多彩なイベントの実行計画づくりが、県、市町村、観光団体、経済団体、地域ブランドなどの協力の下に進められています。

二番目の市町村の自慢づくりですが、これは、伊豆各地域の名人、名品などの掘り起しや創作を通じて、自分たちが誇っている伊豆の魅力を再発見し、伊豆の新しいブランドを自慢していくとします。現在、各市町村の御協力を得て、地域の自慢データベースの作成を進めており、今後、旅行社やマスコミの協力も求めて、これらの自慢を生かした商品開発を進めてまいります。

三番目は、新観光システムの整備です。伊豆を訪れた観光客の人たちが伊豆を快適に周遊できるように、交通・宿泊・景観などを改善してまいります。とりわけ、美しい伊豆は、伊豆を訪れる観光客に対する最大のもちえであり、伊豆に住む人々にとつても、誇りと自慢の源です。県といたしましては伊豆の景観整備に向けて庁内関係部局が協力して取り組んでいるところであり、貴協会からの御提言につきましても、その実現に努力してまいります。

四番目は、伊豆の魅力のPRです。地域の方々の事業参加を促すとともに、伊豆への観光誘客を推進するため、地域レベルから全国レベルまで、様々な広報・宣伝活動を積極的に展開します。

これらの事業を展開することによつて、伊豆地域が、観光を中心として、農林、水産、商工業などあらゆる産業を活性化させ、自らがなびつていける力を高め、来るべき大観光時代に、日本一の観光リゾート地としての再生・飛躍を図つてまいれる所存であります。

皆様におかれましては、今後とも、伊豆新世紀創造祭に對しまして温かい御支援、御協力を賜りますようお願い申し上げます。御挨拶、いたします。

伊豆ワカガエル大作戦



いっそのこと
スマカエル



思い出いっぱい
モチカエル



おいしい料理で
イキカエル



温泉で
ワカガエル

入場無料

住宅展・環境フェアに出展 事業や行事が目白押し

協会と静岡県造園施工管理技士会では夏から秋にかけてさまざまな事業の実施を行い、また、行事に参画した。協会では、九月十二日〜十五日の住宅展へ出展するとともに研修会の開催、県労働部・シルバー人材センター依頼による定年退職者に対する造園緑化技術講習会などを開催。技士会では造園施工管理技術検定受験対策講習会や環境フェアへ出展など大忙しの夏であった。

住宅展へ出展

本年度三十四回目を迎えた
住まい博・静岡県住宅展がツイ



坂本副知事らを迎えてのテープカット

ンメッセ静岡南館で開催され協会も参画、出展した。十二日に坂本副知事ら関係者の出席によりテープカットのちオープン。十五日までの四日間で五万六千人の人場者でにぎわった。協会としては住宅展運営委員に名を連ね、昨年までは、テーマゾーンの設置、その使用としてのセミナー開催などのかたちで参画していたが、本年は一こま借りでの出展。出展は中部支部の大山造園が中心になって、最近の落葉広葉樹を中心とした自然風のガーデンングにウッドデッキを配した庭園を展示。下層には赤、白の

環境フェアにも出展

住宅展より一日遅れて十三日から三日間、同じくツインメッセ静岡北館で開催され、三万一千人の来場者でにぎわった。



社団法人静岡県造園緑化協会

ヒガンバナが咲き、ウッドデッキ横の壁面にはカラコンゴ、ニチニチソウの花を飾り、来場者の注目を集めていた。また、来場者に展示造園材料名当てクイズを行ったところ、植物名を真剣に考える姿が見られ、正解者には協会発行の「街の樹シリーズ」生垣編を贈り喜ばれた。

熱心に見入る来客

こちらには静岡県造園施工管理技士会が出展し、好評を博した。環境問題は、近年の環境問題に対応して静岡県環境部が初めて開催したもので出展内容も、水質問題、大気、ダイオキシン、リサイクル、ゴミの堆肥化等さまざまな身近な環境問題だけに来場者の関心を集めていた。

静岡県造園施工管理技士会



親子でにぎわう技士会ブース

のある種に指定され、水質汚濁に敏感で麻糘沼でも一度は絶えたという、いずれも人気の的。これから、土木に河川工事、農地の溜池や水路整備という、ろな角度から自然復元が試みられる。このような湿地の植物は益々重要視されるようになる。この会場でも植物名当てクイズを行い、正解者に協会発行の「花と緑のポケット図鑑」を贈ったところ、若い女性でおいそぎわいであった。



酒樽を使つての展示

てアツという間に定員オーバー。一家族一セット、経験者は遠慮願うなどして定員内に納めて、二人の名コソビの指導で素焼鉢にパキラヘデラなど観葉植物を思い思いに配置しては植え込んでいった。完成品を見て悦に入っている人、不満気の人などその表情はさまざまであつたが、メインステージの行事としては一番人気があつたようだ。

ガーデニング教室開催
環境フェアの初日、午後一時四十五分から三十分、メインステージでガーデニング教室を開催した。
講師は技士会会員である静鉄緑化上木(株)の安本昌弘さんとアシスタントの飯塚夕子さんの二人。時間がわずか三十分、屋内といふこともあつて、今流行のコンテナガーデンを内容とした講座。先着順五十名にセプトが無料配布されるとあつ



講師をつとめる2人

夏期研修会を開催

九月十四日、住宅展と環境フェア開催中のツインメッセ静岡において、講師に静岡県都市住宅部公園緑地課長 狩野義之氏と(株)大和シंक・エンジニアシィ 石橋達也社長の両氏を講師に迎え、会員六十名が出席して夏期研修会を開催した。



真剣に取り組む受講生

ツインメッセ静岡は平日にもかかわらず住宅展と環境フェアでにぎわつており、今回の研修会場をここにしたいのも両展を会員に見学してもらふ意図からであつた。

まず、狩野氏には「二〇〇一年しずおか緑・花・祭と造園建設業界に期待するもの」と題して講演をいただいた。

狩野氏は、

いと結ばれた。

石橋氏は、

年輩者は自然を知っている。その人たちの感覚はこれからの庭づくり、に大事である。大老とか老中、家老などは何も年寄りを言っているのではなく、経験、知恵の持ち主のことで、その人たちにいろいろ相談し、判断を仰いだが今はそのチャンスがない。

六十才で定年を迎えてもまだまだ働きたい人は、年輩者でも使いやすい機械の開発を行うなど若者中心の労働環境、人事管理を見直せば、年輩者でもまだまだ働ける。そうすることが日本国家のためだと力説された。



狩野氏の講演会

受験対策講習会を開催

静岡県造園施工管理士会

静岡県造園施工管理士会では、造園施工管理技術検定試験（一級、二級）を控え、本年も去る七月二十日、三十一日の二日間にわたり県産業経済会館で講習会を開いた。



真剣に受講する受験生

この講習会は、今年で七回目
で受講生は四十名。一日目が
関係法規をはじめ造園管理、
施工管理、造園計画など、二日
目が造園施設、造園材料など

で講師は乗松文男会長ほか技
士会のメンバーがあたり受講生
は検定試験を一ヶ月後に控え、
真剣そのもの。

この講習会そのものが都道
府県単位で行われるのも珍し
いが、造園施工管理士会の組
織も全国的には少なく、その
活動も注目されている。

昼間、社業に励み、夜間は講
習会のための勉強、そして本番
の講義と奮闘。講義も講師の
経験、過去の出題傾向を分析
しての内容とあって、時間の余
裕のない受講生だけに無駄な
ない講座で大変好評であった。
合格率も例年東京会場より好
成績であるという評判である。

教鞭を執った会員は次のと
うり。御苦労さまでした。
○関係法規（三ノユ）造園建設
（株）山内敏男） ○造園管理・
設計図書（有）小林道園 小林

召二 ○施工管理と施工各
論（天能造園建設（株）水野
豊） ○造園の様式と発達・造
園計画（設計）植栽、天野園芸
（株）望月教彦） ○造園施設
（大昭和住宅（株）鈴木俊男）

○造園材料（源平造園建設（株）
源平太） ○品質管理、機械施
工と工事管理・受験要領（株）
キヤップ乗松文男）

シニアワーク・プログラム 造園・緑化技術講座が始まる

協会では、県労働働部と
（社）静岡県シルバー人材センタ
ー連合会の依頼を受けて、定
年退職者の再就職のための教
育の一環として造園・緑化技
術講座を開講した。

これは、これから到来する高
齢化社会に向けて、六十才で
定年を迎えたら人を教育し、再
雇用してもらおうという以外に、ビ
ルメンテナンス、ワープロ・パソ
コン、介護の三講座が開催され
ている。

造園・緑化部内については今
でもシルバー人材センターに安
価で仕事を奪われているから
と、この講座の受け入れに反論
もあったが、講座終了後、最寄

りの公共職業安定所を通じて
就職希望者、求人希望社の集
団面接等もある一連の事業で
あることで理解された。

講座内容は、関係法規に始
まり、造園施設、植栽、造園管
理、造園材料等、講義と実習を
併せ、一会場十日間の内容。講
師は各地区の技術委員のメン
バーが当たり、一部、法律、造
園の歴史等については、技士会
のメンバーが担当して九月十六日
の熱海会場を皮切りにスター
トし、十月の浜北市、十一月は
掛川市、そして十二月の沼津市
で終了する予定となっている。



熱心に受講するシニア会の皆さん

お知らせ

高齢者の雇用に 御理解と御協力を

（社）静岡県シルバー人材セン
ター連合会では定年退職者や
予定者などの就職を支援する
ため労働省の委託を受けて各
種技能講習会を実施しており
ます。この講習会を協賛してお
り、静岡県造園緑化協会の協力
を得、造園・緑化、樹木の剪定、
病害虫防除など基礎知識と技
能の習得を目指した講習を行
います。

協会会員の皆様には高齢者
雇用の重要性に御理解いただ
き、知り合いの方への受講の助
めと講習会終了後、公共職業
安定所の仲介による合同面接
会への出席と受講生の雇用に
ついて御配慮をお願いします。

開催日程

熱海会場 九月
浜北会場 十月・十一月
掛川会場 十一月
沼津会場 十二月

いずれも十日間、定員二千名
■問い合わせ

（社）静岡県シルバー人材セン
ター連合会

☎〇五四一・二八四一・二五〇

失なわれゆく植物

オニバスの復元活動

静岡水性・湿性植物研究会代表 大坪篤次



オニバス、オオオニバス、ホテイアオイの浮かぶ麻機遊水池

に変わった。

昭和四十九年七月七日記憶に残る七夕雷雨により静岡市内は大きな被害を受けた。これは、麻機沼が降雨時の貯水地の役割を果たしていた証であった。

静岡県では、この麻機低地部分五百ヘクタールを多目的遊水地と設定し、その内八十六ヘクタールは治水緑地と多目的遊水地事業の実施区域とした。

この地域は、市街化調整区域と農用地指定地のため開発がされず、静岡市内に残る自然再生を計る上で最適な空間地となった。

県の事業推進に伴い、掘削現場の土中を調べてみると、昔の地に成育していた植物の種子を多品種確認することができた。

伝説「沼の婆さん」の伝記にも記録されている法器草はオニバスのことであり、昔は麻機

沼一帯をこの葉で覆いつくしていたのである。

しかし、環境の変化に敏感な植物であるオニバスは、人知れずその姿をこの地より消してしまいった。

研究会では、多目的遊水地事業の中に消滅した植物、オニバスの復元を提案し、平成四年、五年の五月総合治水月間の行事の中で市内小中学生多数参加のもと、種まきの行事を実施した。

平成四年実施に於ける発芽は皆無であったが、平成五年度に於ては十株成育をみる事ができた。

発芽し、木葉が水面上に姿を現してからは、水鳥の食害を防ぐこと、水中にあっては魚たちによる根の食害を防ぐことに

細心の注意を払った。

平成五年十月に多数の種子を取獲することができ遊水地の一角につくられたオニバス育苗池に種子を播きつけた。

平成六年五月、水温十八度から二十度上昇すると、昨年十月に播種したオニバス池の種子が発芽をはじめた。

麻機遊水池で結実した種子であり期待は大きい。五月中旬になると多数の木葉を水面上に確認することができた。復元に成功したのである。

一度姿を消したものを復元するには如何に大きな努力を要するものか、この種の保存、種の復元活動を通して痛感した。

研究会は、総合治水月間に併せて行なわれる巴川流域快速環境つくり協議会、巴川流域総合治水対策協議会主催による環境美化キャンペーンに協力して、麻機遊水池で復元に成功したオニバスの成育過程を示すパネルを展示し、来客に対しての説明や案内などを行っている。

また麻機遊水池においては、開花をはじめ八月、花見に来る市民のための環境保全のための草刈、清掃等も実施している。

麻機遊水池には、日本版「種



草刈り仕事活動

物のレッドデータブックに記載されている危急種、絶滅の危機が増大しているを九種類確認しており、これ等の保護のため、これからの活動の重点課題として取り組んで行きたい。

●確認された危急種

ミクリ、ミスアオイ、オオアブノメ、ミノコウジユ、アサザ、ガガブタ、タコノアシ、オニバス、ミズニラ

●会員名簿

アジアサンコー(株)
 静鉄緑化土木(株)
 (株)静岡緑地建設
 春長園緑化(株)
 (株)ひかり造園
 (株)森造園
 (株)八雲
 (株)理研グリーン



復元、開花したオニバス

アシヤマコモが茂り、水中には、を踏み入れれば底無しの中地、陸地にはネコヤナギ程度の植物が育つ単調な風景を思い出す。高度成長期に建設ブームとなり、それ等から発生する残土、残材などの処分地として埋められ沼地は消滅した。

その後土地改良により埋土部分と湿地部分が農地(水田)

県庁内の陳情を終えて

副会長 望月敦彦

生活文化部の中のゆめ未来局の名前にふさわしく各未来局の準備がずらりと並んでおります。国体準備室、ワールドカップ推進、伊豆新世紀創造祭、東海道四〇〇年祭、国際園芸博覧会等それぞれのスタッフが活動し準備をされているのはおどろきました。又環境部の中には全国植樹祭推進室、都市住宅部にはごごもの園開園準備室、静岡緑花祭推進スタッフ、小笠山総合運動公園建設事務所、企画部には空港対策課等があり、土木部、農林水産部、企業局、公社等一日中廻り我々が関係ある課がこれ程多くあると云うのを実感しました。

協会に於いてもゆめ未来局や各部が将来行う事業に対応し自主的にお手伝いを行って行かなくてはと思います。一部では取り組んでおりますがまだまだ全体と云うわけには行けません。経費をおしよす地城に合わせたボランティア活動等必要かと思えます。

各社全員が各地区の発展のために骨身おしよす活動していると思えますが各社生残りの為にも一丸となって取り組んで行く事が大切な事です。各地域に於いても提案を行い自分達の手で仕事を作り上げて行く事が大切です。平成十年度は増々厳しくなっていると思えますが全員一丸となって頑張りましょう。

剪定枝を利用した植木畑の間の菜園

東部支部長 立木 泰

小生も野菜作りを始めて、三年になります。夏野菜が主で、葉菜類、果菜類、根菜類を合わせると一五種以上にもな

ります。有機野菜を目ざしておりますが無農薬ではなかなか思うようにはいきません。特に虫たちには開口しており、特にトマト、ナス、トウモロコシ等々のぞたちから取巻を考えると、つまんで殺さねばなりません。虫たちと野菜の間に立ち、少々かわいそうで心を傷めております。野菜作りは、先づ「土づくり」からと言われておりますので、家業の庭園管理の際、旅館保養所、別荘等から出される、年間何十トンという樹木剪定枝をカッターで細かく粉砕し、間に石炭窒素の粒状をばらまき、積み重ねて十分ねかせておきます。それを完熟堆肥として大量に使用しており

ます。色、艶もよく収穫期間も長くなります。何と云っても甘味があります。スーパーなどで買ってくる物とは一味違うように感じます。毎日、新鮮な野菜をおいしく、いただいております。また刈草は、雑草押えに敷ワラの代用として利用して、います。これからも本業の合い間をみて、甘い新鮮なおいしい野菜作りに精を出します。

本年度の育成管理巡回指導 全日程終了

事務局

本年度も過去にグリーンバンクで施工した緑化施設の巡回指導を実施した。

本年度は平成十七年度施工地五十箇所、昭和六十三年度施工地十六箇所、計六十六箇所を対象に実施した。対象地が学校や社会福祉施設が多く、管理費が十分でなかったり、管理に知識や技術がなかつたりで巡回指導が大変感謝されている。一般の事業では施工後のアフタケアは殆ど行われない

が、グリーンバンク事業では永年続いている。

しかし、せっかく善意の基金で施工したのに、現地へ数年ぶりに出向くと十分な管理がされておらず落胆させられることもある。この巡回指導では現地の施工員は必ず立会を義務付けられているのでその会員は施工の技術力を見られたり、その後の管理の良し悪しで一喜一憂といったところ。

来年の総会の席上、優良管理施工地の表彰を行うので、支部の巡回指導者は今からその準備をお願いします。



たわわに実ったトマト



炎天の中の巡回指導



本年は台風発生が少ない割には日本へ上陸が三本もあり各地に大被害をもたらした。そのため、再び治水一辺倒の河川行政にはなれないだろうが、河川法は管理計画を住民参加型で策定する方向に改められ、すでに各地で多自然型と称してさまざまな工法で工事が進められている。又農地も湖池、水路、農村整備においてそのような方向へ進んでいる。そんな折、建通新聞に本頁のような記事が掲載された。ピットフッド、多自然型と論ぜられる昨今、我々全員ももっと自然界を勉強しなければと思う。

夏がやってきた。川あそびが楽しい季節だ。素足になって川に入ると、冷たい水が心地いい。淵に飛び込むと、もっと爽快だ。釣りもおもしろい。鮎(あゆ)、鱒(ます)、ヤマメ、アブラハヤやオイカワ

だつて釣ると手心えがたまらない。そして、カヌー、バードウォッチング、バーベキュー、キャンプと、川の楽しみ方はまだまだたくさんある。清らかな川の流れを見たり、せせらぎを聞いているだけでも心が穏やかになる。ただ、

それも自然豊かな川でその話である。鳥のさえずりも聞こえず、生き物の気配がなくては、もはや川とは言えない。

かつては、自然のままの川が日本にあった。しかし、今は人の手が入っていない川はほとんどない。河川整備は、これまで治水といえるの下に堤防や川底はコンクリートで固め、できるだけ効率よく水を流すことに重点を置いてきた。人間の居住地がどんどん拡大し河川の氾濫源だった場所まで宅地になる状況の中で、国民の生命と財産を守るのが行政の責任である以上、河川整

備は洪水防止と土主主義にならざるを得なかった。その積弊だったのも大きかった。

二つした経緯があつて、河川行政は近年、施策の方向を大きく転換した。平成九年は改正河川法が施行され、河川管理の目的に「河川環境の整備と保全」が位置付けられた。建設省は今年、「美しい山河を守る災害復旧方針」を策定し、これまでのようなコンクリートブロック一辺倒による護岸ではなく、自然の素材である木や石を

使い、自然の回復力で生態系を復元する方向を打ち出した。また、木曽川沿いに自然共生研究センターを設置し、河原や水辺の植物をどのようにすれば保全できるのか、生物の生息しやすい河岸や高水敷をどうすれば効果的に形成することができるのかについて研究を始める。

だが「環境にやさしい」というキャッチフレーズで導入されている工法での整備内容を見ると「不自然」という印象が強い。都市公園のような植栽や構造物が使わ

れていて、どうも自然の風景という感じがしない。それは、整備担当者がマニュアルに沿って画一的に整備しているせいではないか。せっかく施策の方向を転換しても川に興味がなく、川の生態系を理解のない人間が河川行政を担うとすれば、結局、自然復元の効果は期待できない。

川は生きものだ。いつも同じように流れているわけではない。川によって生態系に個性がある。また、山間地の清流、大河川の中流部、そして市街地を流れる都市河川とでは、必ず整備手法も異なる。川に関わる仕事をやるのであれば、川をよく知る必要がある。その最もとっさり早い方法が川であることだ。昔、「書を捨てよ、街へ出よう」という映画があった。河川行政に携わる公務員に行ってほしい。治水は今もなお至上の命題だが、一度、失われた自然を回復することではできない。我々の時代で、自然を「消費」してはいけない。河川整備は、川の生態系を知ることから始めよう。

河川整備は生態系の理解から

平成十年八月三日 建通

お知らせ

例年一月下旬に開催しております賀詞交歓会は、来年は一月十三日に開催するよう決定しております。今から御予定の中に組み入れて下さい。

編集後記

本年は、植物展がすっかり狂ってしまい、野山の花もどどどっているようです。

八月から九月にかけて協会的事業が集中し、秋号はそれらの内容を登載しました。

住宅展には協会として、環境フェアには技士会として参画出展しましたが、いずれも好評でした。大勢の皆さまの御協力ありがとうございました。うございました。

また、支部だよりの投稿が多く、会員としての投稿が多数ありました。

次号はもう新年号です。支部活動や日常の活動で新春にふさわしい記事を持っています。次号は一月一日発行の予定です。

建 滴